

RUBeC 演習に参加して

川 嶋 遙

Haruka KAWASHIMA

機械システム工学専攻修士課程 1年



図1 最終プレゼンの様子

1. はじめに

私は今回、2017年8月19日から9月4日までの約2週間、龍谷大学北米拠点 RUBeC (Ryukoku University Berkeley Center) で行われた RUBeC 演習に参加した。

このプログラムでは二つの受講科目があり、一つはテクニカルライティングというもので、自身の研究論文の要旨を英語でまとめ学術誌等に投稿できるよう仕上げる内容であり、二つ目はプレゼンテーションの講義であり、国際学会等で発表できるよう英語でのプレゼン能力向上に努めた。

また、龍谷大学の協定校である U.C. DAVIS とサンタローザにある KEYSIGHT TECHNOLOGIES 社を訪問、見学させていただいた。

2. 参加理由と目的

私が RUBeC 演習に参加した理由としては国際学会等で自身の研究を発表できるようになるため、また今後の海外経験に繋がると考えたからである。また、異国の文化や価値観にふれ、自身の視野を広げたいと思った。そのため参加するにあたって英語への苦手意識を克服するため積極的に発言し多くのコミュニケーションをとることに努めた。

3. 授業内容

3.1 テクニカルライティング

授業は午前と午後に分かれており、午前はテクニカルライティングと呼ばれる授業で、自身の研究の要旨を用いて冠詞・前置詞・接続詞などの基礎的な文法を学んだ。特に冠詞は今まで特別意識したことがなく使用しており、それらの正しい使い方を授業を通して学ぶことができた。また要旨の内容全体も

よりアカデミックで分かりやすい内容になるよう修正を加えていただき、時には話し合いを重ねることで内容の向上に努めた。

3.2 プレゼンテーション

午後からのオーラルプレゼンテーションスキルの授業では、最終的なプレゼン発表を目標に向けて発表でのポイントとなることを学習したり、プレゼンで使用する資料作成に努めた。発表のポイントはジェスチャー、ボリューム、アイコンタクト、発音、イントネーションなどがあり、どれも私達日本人が苦手としている要素だと感じた。

最終日には今まで学んできた事を取り入れた上での最終プレゼンを行った。やはり難しいところもあったが、初回の発表に比べて手応えを感じたところもあり、良い経験となった。これからの学会発表などに繋げることが出来る貴重な経験だったと感じた。

4. 大学および企業訪問

RUBeC 演習の2週間のうち、1週目の水曜日は協定校である U.C. Davis に、2週間の水曜日は KEYSIGHT TECHNOLOGIES 社に訪問・見学させていただいた。

UC DAVIS とはアメリカ、カリフォルニア州デービス市に拠点を置く州立大学であり、多くの学生が在籍している。学内のほぼ全ての事を生徒達が管理しており、ゴミから肥料を作ることに取り組んだり、広大なキャンパスを移動する際に使用する自転車の整備なども自分達で行っているといった特色が見られた。工学部には多くの教授や学生が在籍しており様々な研究が行われていた。研究内容によって

は他学部である農学部、医学部、獣学部などとの連携や、学外との連携も盛んであった。私が日本の大学とは最も違うと感じた点は学内の研究において、他学科や、他学部の分野と連携して取り組んでいるところだ。自身の研究においてそういった交流は少なく驚きと関心を感じた。それらの活動はより多くの新たな視点と成果が得られる可能性を有している。これからの自身の研究を進めていく中で他分野の人の力が必要であれば積極的に連携していき、より良いものを追求していきたいと感じた。

KEYSIGHT TECHNOLOGY とはアメリカに本社を置く、世界有数の電子計測器メーカーであり、これまでも数多くの製品を生み出しており 2952 件の特許を取得している。現在では、無線通信、航空・宇宙・防衛分野、半導体の市場にも貢献しており、タッチパネルで操作できる電子機器や、より安価なオシロスコープなどの開発、自動運転自動車の開発にも携わっている。

会社内の見学では様々な製造エリアや製品のテストの様子を見学させていただいた。製造やテストで使用する機器はほとんどが KEYSIGHT 社で製造されたもので行われており、今までの自社の製品を効率的に活用している。製品開発においては実際に使用される環境よりもより過酷な条件でも使用できるよう多くの試験を行っており、その様子も見学させていただいた。見学させていただいて、開発者としてより良いものを追求していることをやめない姿勢が垣間見えたり、また自社の製品でほぼすべてのテストエリアを形成しており自分たちが作っている製品への誇りが感じられ、ものづくりに対する姿勢は

見習うべきところだと強く感じた。

5. 生活について

現地での生活はホームステイでありホストファミリーの方と共に生活することになるのだが、私は英語が喋れないので渡航前は不安が大きかった。しかし、行ってみるとホストファミリーの方はとても親切で理解しようと努めてくださり、様々なサポートをしてくださった。これらは街に出ても同様であり、見知らぬ人でもとてもフレンドリーで多くのコミュニケーションをとることができた。

6. おわりに

今回のプログラムに参加したことで日本では味わえない異国の文化や価値観、生活を体験できそれらはとても貴重な経験だと感じた。英語に関しては片言であってもジェスチャーや気持ちである程度伝えることができ、それらができた時はとても達成感があると感じた。この達成感は今後英語を話していく際に大きな自信となりうる場所であり、とても良いきっかけとなると思われる。今回の内容だけではおそらく英語を話せるようにはならないだろう。しかし、このプログラムは「自分から行動しないと成長はできない」ということを再認識させてくれ、失敗を恐れずチャレンジすることの大切さを感じることができると感じた。

私は将来、海外でも活躍できる技術者を目指しており、そのためには英語の上達は必須である。この経験がもたらしたきっかけをもとにさらなる成長に努めたい。